

吉原順子——八路軍に従軍した日本婦人——

福 永 操

(解題) 大岩川 嫩

〔解題〕

遅きに失した中国日本人孤児の肉親探しは、日本の中国侵略戦争の重い歴史のツケを、あらためてわれわれにつきつけている。かれら日本人孤児たちは、敗走する日本居留民の子供たちが、本人の意志とかかわりなく中国の地に留めおかれたものであった。一方、すでに成人であった非戦闘員のひとびとのなかには、日本帝国主義の崩壊後に、周囲の状況に呑み込まれたばかりでなく、ある程度自己の選択で中国の地にとどまり、解放新中国の社会になんらかの居場所をもって生き抜いてきた人々の存在がある。これまで、そうした人の生活記録がいくつか世に出、われわれの目にもふれてきた。例えば、山本市朗『北京三十五年』（岩波新書、1980年）等である。

ここに紹介される吉原順子さんは、応召軍人の家族として中国に渡りながら、敗戦後子供を亡くし夫は消息不明となった時点で、自活のために内戦期の八路軍の看護婦として従軍するという数奇な体験を経ている。しかも、日本帰国が可能となったのちも、自己の意志で、そのまま中国に定住するという第二の人生を選びとって生きてきた。このような日本女性は、やはりきわめて稀な存在であろう。

その聞き書きによる記録の筆をとったのは、吉原順子さんの従姉にあたる福永（旧姓・波多野）操さんである。操さんは、ただ単に身内の埋もれた人生を記録しようとしてこれを書いたのではない。それは、この記録の付記までを読み通される読者には理解できるはずである。従姉の順子さんは、戦前の日本のいわば上層に位置する知識階級の出自で、何ら特別な思想的背景ももたず、一軍

人の妻として夫の駐屯地である満州に赴いただけの一女性であった。それが、「働かざる者は食うべからず」という認識を自然に身につけ、労働者の余生を保証する中国に骨を埋めようとするにいたった経緯はどのようなものであったのかがここには語られているのである。それは、戦前から日本の社会で共産主義運動と女性解放問題のはざまに苦闘してきた操さんなればこそその視点でもあるといえる（『日本社会運動人名事典』〈青木書店、1979年刊〉の波多野操の項および本文引用の同氏自伝参照）。

次に、この記録の内容のうち、1945年8月以降の状況について、やや立ち入ってふれてみたい。

8月に入ってから水曜日、興安南省北端の阿爾山の家に突然いつもなら土曜帰宅の夫がやってきて、ひそかに避難時期の迫っていることを告げた、という。この年、8月初めの水曜は、1日と8日である。文脈上8日でないことは明らかだから、1日ということになる。

ソ連参戦が迫っていたとはいえ、在満の一般人や開拓団員にとっては、そうした情報は全くなかった。前戦司令部の幹部だからこそその情報であつたろう。8月8日夜の空襲というのは、正確にはその夜半過ぎ、すなわち9日未明のことである。その空襲後、この記録にもあるように直ちに避難列車に乗り込むことができたのは、軍家族および満鉄関係者だけであつた。その間の事情を『満蒙終戦史』（満蒙同胞援護会編、1962年刊）は、輸送にあたって軍・官・民の区別はなかったが、「結局において、もっとも命令し易く、もっともまとまり易い軍家族、満鉄社員家族らが最初に引き揚

げて、世人の大なる指弾と誤解を受ける結果となった」（16頁）と弁護している。しかし、取り残された一般日本人の苦境は凄惨をきわめ、集団自決を含む多くの悲劇を生んだことは周知のとおりである。現に、阿爾山よりも後方の索倫と白城の中間に近いところにあった「東京開拓団」の、ほとんどが老幼婦女子の800人は、8月14日から17日までの悲惨な逃避行の過程で次々と集団自決し、あるいは殺されている（『満蒙終戦史』806～812頁）。また、阿爾山よりさらにソ連国境に近い興安北省のハイラル（海拉爾）では、軍司令部から「在ハイラル市民は全員玉砕を期しハイラルを死守すべし、軍は退いて興安嶺陣地に至る」という指令が出され、それは「しかも軍家族は全員軍用列車で興安嶺の東へ避難し去ったあと」（満州回顧集刊行会『ああ満州』1965年刊、807頁）ということさえあった。残留日本人孤児の悲劇も、実にこうした状況から起こった。

避難列車の辿り着いた通化には、すでに「満州国」の首都としていた新京（長春）を放棄した関東軍総司令部が移動していた。街は避難民で溢れ、伝染病が蔓延し、この前後における通化での死者数は4,500人（『満蒙終戦史』518頁）とされている。敗戦後間もない9月2日に亡くなった順子さんの愛児もその1人であった。これまでに前掲の二書を初めとして多くの満蒙敗戦期の記録があるが、この聞き書きもまた、この時期について

の一軍家族の貴重な証言たるを失わない。

さて、より以上に「証言」としての価値をもっているのは、やはり八路軍の募集に応じた順子さんの体験がありのままに綴られている後半部分であろう。

これまでの多くの記録類では、各地での八路軍の軍規厳正と施政の公正については、おおむねこれを認めながらも、「遺憾であったのは看護婦傭員として、日本人婦女子の提供を強制したこと」（長春の場合。『満蒙終戦史』206頁）などと述べているものが多く、これに自発的に応募した例があったことには言及されていない。

ところが、順子さんの場合は、生活のためという動機で進んで応募、八路軍と困難な内戦期の行をともにし、それが今日までの第二の人生の出発点になったのである。そして、留用日本人たちのほとんどが引き揚げた後も踏み留まって、恩給75%を支給される資格を得るまでも働きつづけた。

その彼女の方向を決定づけたものはなにか。それは、“人間の正当な労働に正当な尊敬が払われる社会”をその労働の場に見出すことができたからであることが、この淡々とした聞き書きからにじみ出ている。

日本の上層家庭婦人から新中国の一労働者へ……この記録が物語るものは、大きな歴史の1頁にはかならない。

はじめに

吉原順子（よしわら・じゅんこ、1913年—大正2年7月7日生まれ）は私のいとこ（従妹）である。かの女は、敗戦の1945年8月、満州在留日本人たちの避難民といっしょに吉林省の奥地まで引きあげてきたが、満鮮国境の交通途絶で動けなくなり、ひとり子もそこで病死したらしいということまでは、のちに、引揚者の人たちの話でわかったが、その後の消息は不明であった。在満日本人

の行方不明者は余りにも多数で、戦後の混乱のなかで、さがしようもなかった。かの女のきょうだいや親戚たちも、順子はたぶん人知れず死んでしまったのだろうとあきらめていた。1979年になって、はじめて、北京にいるかの女から、千葉に住むかの女の長兄の古い住所宛てのたよりが届いて、わたしたちは順子が生きていたのかとおどろき喜んだ。帰国をうながしたが、かの女は帰国する意志はないということだった。ところが、1983年秋

になって、順子は、日本政府が中国在留日本人で戦後40年間一度も帰国したことの無い者には訪日の往復の旅費を支給することになったというのでそれを申請して、短期間だが日本を訪問するつもりだというたよりをよこした。そしてかの女は、1983年12月に北京から東京に来了。私たち在京の親戚は、そのときはじめて、この40年間のかの女の経験をくわしく聞くことができた。順子は短期間の滞在で、1984年1月下旬に北京に帰ってしまった。以下は、かの女がこのとき話した内容の聞き書きである。

I.

順子の父、波多野貞之助は、1890年代（明治20年代）に文部省の留学生としてイギリスに行き、教育学を専攻して、生涯、東京高等師範学校の教育学担当の教授であった（貞之助は私の父高吉の兄で、波多野一家については私の自伝「あるおんな共産主義者の回想」〈れんが書房1982年刊〉に書いた）。貞之助は男二人女二人の子を持ったが、順子はその末むすめである。

貞之助の住居は小石川区原町の、植物園に近い高台の静かな住宅地で、末っ子の順子は高師付属小学校に入学したが、元気のよいおちゃっぴいな女の子であったことを私も記憶している。1923年8月に貞之助が病死し、その後、順子の母が肺結核になったのでその療養のために、順子とそのすぐ上の男の子である勇とを連れて神戸郊外の芦屋に住むようになった。それで、順子は1925年芦屋の甲南高等女学校に入学した。高女在学中のかの女のつくいな学科は英語と音楽だったという。しかしかの女が女学校4年のとき、母は病死した。それで順子は1930年高女卒業後は上級学校へ進むこともできなかった。順子の長兄である正はそのころすでに東大農学部を卒業して千葉の農事試験場技師になって結婚して千葉に住んでいた。順子はその兄の家に厄介になって、家事手伝いをして

いた。

順子のいとこである私の姉、富塚文子は、夫の清が東京大学工学部航空発動機部の主任教授であったから、諸方から結婚のなこうどを頼まれることが多かった。文子の仲介で、順子は1935年（昭和10）に日本銀行本店の社員であった吉原孝義（1910年生まれ）と結婚した。そして富塚家から近いところの借家に住んだ。

孝義は、酒もあまり吞まず、どうらくも別段になく、好きなものは将棋だけだった。日銀本社の社内の将棋クラブでの将棋の試合に勝った賞品の、5、6本の新しい洋傘をはじめ、その他いろいろの品が家のなかに積み上がっていた。1939年に男の子（^{ひろし}宏）が生まれると、孝義は、かわいくてたまらないというようすで、まだ生まれて2、3か月で何もわからないあかんぼだというのに、いろいろなおもちゃをたくさん買ってきて並べるといふふうだった。

日銀は、じみな仕事だが確実この上なしの勤め先だから、もしあの戦争がなかったならば、孝義は定年まで平穩無事に勤務して、たぶんどこかのいなかの支店長ぐらいい出世したであろう。そして順子は、家事と子どもの世話をするのが好きな性質だから、なみ普通の家庭婦人としてしずかな生涯を送ったであろうと思う。

II.

1940年（昭和15）吉原孝義は応召で主計少尉として出征して満州に行った。順子は幼い宏を育てながら東京杉並の留守宅をそのままでもっていた。ところが1944年になると孝義は順子に宛てた通信で、北満に駐留する自分のところに来たほうが安全で、軍の給与も豊富で生活がらくだから、ぜひ来るように、と熱心に勧めて来た。順子は行きたくなかったが、孝義が非常に強く要望して、しまいには、来なければ離縁するとまではげしい手紙をよこすので、ついに決心して、留守宅をか

たづけて、かぞえ年6歳の宏を連れて満州に行った。

順子たちが1944年（昭和19）4月19日東京を出発し、ハルビンの西方の白城（パイション）を経て、そこからさらに軍用列車で12時間もかかって目的地の阿爾山（アルシャン）に4月26日に着いたときにはまだ雪が降っていた。ここは大興安嶺の中央で、北方は満州里（マンチュリー）にも遠くないところで、河ひとつへだててソ連軍と直接に対峙する国境の最前線の軍事的要衝であった。

（しかし日本本土がすでに米軍におびやかされていた当時では、日ソ中立条約が厳存するかぎり、ここがいちばん安全だと孝義は考えたのであろう）。ここに、全部で200人ぐらいの軍人家族たちがかたまっていた。山のなかだから、その軍人住宅が並んでいるあたりには住民はまったくいなかった。孝義が勤務する前線司令部はそこからさらに山一つ越した前方にあった。孝義は司令部に泊まりこんでいて、週に1日、土曜日に一晩泊まりで順子たちが住む家に帰ってくるだけであった。

7月と8月は孝義が阿爾山からハルビンに転勤になったので、順子たちもそこで暮らし、それから、白城と阿爾山との中間にある索倫（ソロン）のそばの徳伯斯（トボス）に引越し、翌年（1945年）4月阿爾山に帰った。

1945年8月に入ってからだが、いつも土曜日に帰宅する孝義が、めずらしく水曜日に帰宅した。そして、もし司令部から緊急命令が来たばあいには、家財家具などは全部捨ておいて、着がえなど持てるだけの物を持ち、宏を連れて、軍が用意する避難列車に即刻乗るようにしろ、けっして乗りおくれたりしないように、絶対に皆といっしょに行動するように——と言った。そしていつものように一晩泊まって、翌朝前線司令部に出て行った。それが、孝義との永の別れであった。（注）

8月8日の夜、突如空襲があって、即時避難命令が伝えられた。順子は身のまわりの物だけ持っ

て、宏を連れて、集合場所へ行った。200人の軍家族たちをのせて、すずなりになった避難列車は、途中、空襲を受けて止まったり動いたりしながら、白城を経て、数日かかってようやく吉林省の奥地の通化（トンホワ）まで来た。しかしそこから先へはもはや汽車を動かすことができなかった。そして通化で、8月15日の玉音放送を聞かされた。順子はその時まで、日本が戦争に負けるとは夢にも思わなかったから、涙を流して泣いた。

軍人家族ばかり200人ぐらいのこの避難民の団は、通化で、まにあわせのバラックの収容所にほうりこまれて暮らした。地べたにごさを敷いて、配給の古いふとんにくるまって寝るだけの収容所であった。食事は奥さんたちが交代で炊きだしをした。

宏は、汽車の中からすでにおなかをこわして39度の熱を出していたが、この収容所で病気が悪化した。のちに考えると、はしかから肺炎をおこしたのかと思うが、医者も薬もないのだから、どうしようもなく、9月2日に死んでしまった。この一団の避難民のなかの子どもたちはほとんど残らず死んだ。

順子も病気になって高熱を出して寝こんでしまった。あとから考えるとチブスらしいが、医者もないのだから、ただ寝ているだけだった。自分では死んでしまってもいいと思っていたのだが、死なないうで、だんだんと回復した。

〔注〕 吉原孝義はその後いまにいたるまで「行方不明」のあつかいで、戦死の公報さえもない。孝義の所属部隊はソ連軍に直面する最前線部隊であったから、1945年8月9日のソ連軍の総攻撃開始と同時に全滅して、たぶん捕虜さえも残らなかったのだから、日本政府当局が彼らの生死を確認する手段がなかったのであろうか。したがって、ふつうならば順子に渡されるはずの遺族扶助料もなにもない。ただ、日銀ではのちに退職の扱いにして、退職金を孝義の兄に渡

したというが、その兄のゆくえもわからず、探しようもない。

III.

順子の病気は薬も何もなかったのに、自然に回復して、起きられるようになった。しかしもう所持金も残り少なくなったから、何か働くことを考えなくてはならないと思った。順子の長兄の正は戦争中にやはり応召していたが、敗戦後はどうなったか、その生死も順子にはわからなかった。次兄の勇は、応召して軍務に就いていて肺結核になり、順子がまだ内地にいた頃にすでに戦病死していた。順子が内地に帰還できたとしても、職業資格を何も持たない順子は働く口がないだろうし、満州で生活のために働く口があるのだったら、帰国のために無理をしてはねおる必要はないと思った。

通化県には終戦後まもない頃から八路軍の遊撃隊が入って、八路軍と国民党政府軍とが戦争をしていた。通化には以前から日本人が経営していた病院があって、日本人の医師や看護婦がいた。八路軍が通化に入ると、この病院は八路軍に接收されて八路軍がその経営をうけついで。日本人医師や看護婦も八路軍の看護部隊の指揮下にひきついて働いていた。そのころこの病院が工作員（勤務員）を募集していた。それを知った順子は、病気がよくなっていたから生活のために働こうということだけを考えて応募して、採用された。そして1945年12月からこの病院に勤務した。

1946年6月に、八路軍のこの遊撃隊は通化を去って、その奥地の臨江（リンチャン）に移動した。病院の勤務者のうちの日本人は大部分が通化にとどまったが、順子はこの看護隊に残留した少数の日本人とともに臨江に移った。だから臨江でのこの看護隊の勤務者の大部分は中国人の医師や看護婦だった。そのうちにこの遊撃隊の戦況がますます不利になってきたので、1946年12月に、この隊は臨江を去って、さらに奥地の長白山に歩いて移

動した。このときには日本人の勤務者はいっそう少なくなったが、それでも、女20人、男7、8人の日本人が隊とともに長白山に移動した。日本人の医師も2人残留していた。

長白山への深い山の中の移動行軍はもっぱら歩いておこなわれた。1週間ぐらいかかった。いつも、深夜の12時頃出発して翌日の午後3時頃まで、一日に120里（中国の1里は約0.5キロ）ぐらゐ歩いた。雪はひざまで積もっていた。看護隊の女たちは、自分の所有物をひとまとめの荷物にして自分で背負って、夜ねるときに使う薄い中国ふうのふとんも巻いて背負って歩いた。患者の担架はその土地の人民に行列で担いでもらって、自分たち看護人はそのそばについて歩いた。看護婦の若い娘などがつらさのあまりに泣くと、涙が氷柱（つらら）になって下がった。空気が冷たいからマスクをすると、息が凍ってマスクが氷の板になるというふうだった。

隊では衣服は支給された。隊員の食事は部隊から配給になったが、主食は高黍（コーリャン）粉をこねた蒸しパンなどで、おかずは大根のおつゆぐらゐだった。夜はわかれわかれに民家に宿泊したが、民家では炕（^{カン}オンドル式の暖房）にねかしてもらった。せまいところに大勢で寝るのだから、からだをぴったりくっつけて並んで寝て、満員になった。夜中にトイレに立ってもどって来ると、もぐりこむ隙間もなかった。しかたがないから、しゃがみこんで待っていて、誰かがトイレに起きると、そのとたんにその隙間にもぐりこむというふうだった。ある夜中に病院の処長が見まわりに来てそのようすを見て、寒いだろうと言って、自分が着ていた外套を脱いで、かけてくれた。

長白山の奥地のこの病院でも、院長をはじめ、指導員は女が多かった。中国共産党八路軍が延安で生まれた頃からの有名な八大規律——「人民の所有物は針一本釘一本でも取ってはならない」「女をからかってはならない」など、これにそむ

く者は即時最高の厳罰に処する——という基本規律は、この満州の深い山奥の遊撃隊でも厳守された。男と女のあいだの待遇やとりあつかいの差別はまったくなかった。終戦直後の満州の治安状態の悪さは周知であるが、この八路軍の一部隊の中にいるかぎり、女たちが、女であることにもとづく侮蔑や暴行をうける心配はまったくなかった。

隊内では、地位が上であろうと、隊長や指揮官であろうと、いばることはまったくなかった。待遇の差別もなかった。部隊の全員が上も下もなく、苦しいときには平等に苦しい思いをするのだから、どれほどつらく感じるときでも、がまんすることができる。順子たちが日本人であることの民族差別もまったくなかった。中国人の看護婦たちは若い娘が多かったが、順子たち日本人の女たちはみんな年長だったから、針仕事に慣れていて、自分たちの持ちあわせの針と糸で、傷病兵たちの肌着や衣服などのやぶれたところを、洗濯のついでにつくろってやったりするので、中国人の兵たちから感謝され好意をもたれて人気があった。

順子たちは看護婦としての教育を受けていないが、この看護隊のなかでは形式的な看護婦資格など問題にならなかったから、できることは何でもしたし、あらゆる雑用をした。朝はまだうす暗いうちから起きて、患者の世話や、包帯交換や、その包帯を始めいっさいのよごれ物の洗濯などをした。その頃は病院で使う消毒薬さえも不足して、消毒薬のかわりに、にんにくをすりつぶしたものを傷口に塗るというしまつだった。長白山脈の奥深くをあちらこちら移動していたときはこの部隊の戦況が最も苦しいときだったから、6か月ぐらい給料も貰えないときがあった。だから洗濯に使う石鹼を買う金もなくて、塩を使って洗濯をした。

夜は、8時ごろに夜番の少年が来て交代するので、順子たちは宿舎へ帰った。宿舎では、夜の照明に、お椀に少量の油をいれて、細い芯をいれて、その端に火をつけて燈火にした。ときどき、夜、

油をすこし貰ってきて、コーリャンの御飯を油でいためてみんなで食べたりするのが楽しみだった。

そういうふうで長白山のあたりを移動していたが、1948年12月に瀋陽（＝沈陽、戦前の奉天市）が解放されたので、この部隊は瀋陽に移動した。そして瀋陽の大きい一病院をこの部隊が接収した。

IV.

瀋陽に来てから、この部隊にいた日本人は散りぢりに解散したが、多分その大部分は日本に帰国したであろう。順子たちのような、看護婦資格を持たない女たちは、瀋陽の大病院の正規の看護婦にはなれない。そこで、希望者は、この軍の病院の関係者たちの家の保姆（ボーモ）になるということであった。

順子は、戦争中に応召した長兄の生死もわからず、自分は日本に帰国しても「芸なし」で、ろくに職業に就くあてがないから、満州で働く口があって生活の保障があれば、そのほうがいいと考えた。そして1949年2月から、この八路軍病院の病院長であった女医の陳任采（チェン・レン・サイ）とその夫の柳静（リュウ・チェン。当時、瀋陽の衛生部の課長）夫妻の家の保姆——子どもの世話をする家政婦——になった。この夫妻は1944年頃に延安で結婚したという。ふたりとも青年時代からのきっすいの中国共産党員である。

その年、陳さんの第二子（女）が生まれた。そして1949年9月に陳さんは撫順の病院長になったので、順子もいっしょに撫順に移った。1950年2月に、陳さんの夫の柳さんは北京の解放軍後勤政治部に所属する部長になったので、先に北京に行き、同年4月頃に家族を迎えに来て、いっしょに北京に移った。そしてすこしたつと、夫人の陳さんは、北京からすこし離れた通県（トンシェン）の結核病院の院長になった。柳・陳夫妻はどちらも北京の住居には1週間に1日しか帰ってこないで、その留守をあずかって子どもたちの世話を

するのが順子の仕事だった。

陳さんは週1日帰宅するだけだが、子どもたちに対する教育方針として、年齢は幼くても自分でできることはいっさい自分でするように、決して甘やかさないようにと、しつけていた。そして51年3月に第三子（男）が生まれた。

柳さんは北京政府の高官であるが、帰宅したとき玄関に迎える順子に対して、いつでも、まったく対等の人に対する挨拶とおなじような鄭重な態度での挨拶（日本語でいえば、「こんにちは、お変わりありませんか」というふうな）を、決して欠かしたことがなかった。食事のときには、順子も同じ食卓につくのを待っていて、順子にまず箸を取るようにすすめて、主人である柳さんが先に箸を取ることを決してしなかった。家政婦の地位にすぎない順子に対するこの完全に対等の礼儀正しい態度は後年まで変わることがなかった。

北京では、子どもが2歳になると託児所にあずけることができた。北京の託児所は日本のように昼間だけの託児でなくて、毎週6日間をとおしてあずかって、1週間に1日だけ親たちの家に連れて帰ることになっている。1952年7月に、柳・陳夫妻の3人の子どもはみな託児所に送られることになった。そして順子は、柳さんの紹介で、北京の印刷局で働くことになった。しかしそのときは宿舍もなかったの、順子はひきつづき柳・陳夫妻の家において、この家から印刷局工場に通った。そして53年に印刷局工場の寄宿舍ができたので、その寄宿舍に入ったが、柳・陳夫妻の家にはやはりしじゅう訪ねて行っていた。

北京の印刷局工場には3000人の従業員がいたが、日本人は順子ひとりだけであった。しかし、日本人だからといって差別されたことは一度もなかった。順子が入れたのは製本部で、本をとじて製本する仕事であった。本をとじるのに必要な針金などの材料が不足したときに材料置場の倉庫係りへ貰いに行っても、なかなか出してもらえない

ことがときどきあった。そういうときに順子が代わって材料を貰いに行くと、なんとかかんとか言って、いつも貰ってくるので、そのうちに、材料貰いは順子にかぎるといわれるようになって、職場のなかまのあいだで「人気者」にされるようになった。順子が日本人だからといって差別されるところではなかったのだった。

そういうふうにして順子は印刷局工場の一労働者として11年間勤めた。1963年6月に、柳さんは青海省に転任した。夫人の陳さんもそこへゆくことになったので、順子は夫妻の子どもたちをあずかって留守宅の世話をすることをたのまれて、承諾した。そして印刷局を退職した。

中国では、国営工場の労働者で20年以上勤続した者は、その最後の勤務時の給料と同額の退職恩給を生涯給与される。15年以上20年以内の勤続者は、最終給料の75%の退職恩給を生涯もらえる。順子は、八路軍に従軍したとき以来18年間勤続したことになるから、退職後も、印刷局での給料の75%を、毎月、印刷局から順子の住居に届けてくれる。

柳さんは、その後まもなく北京での前職にもどるようになった。したがって夫人も以前からの病院に変わらなく勤めることになったが、順子はやはりこの夫妻の家において、家政婦の仕事をした。

1966年から「文化大革命」の騒ぎになった。順子とおなじような家政婦の仕事をしていた女たちの住居にも紅衛兵があばれこんで、家財道具などをめちゃくちゃにぶちこわされたりした例が多かったという。しかし、柳氏が順子をかばって、この女は自分の家族とまったく同じだから、決して乱暴を許さない、と断固としてがんばってくれたので、順子はなにごともなく無事に済んだ。

しかし「文化大革命」のために、1969年12月に、ついに、柳さんは、それまで9級であったのが11級に落とされて、山西省の北の端の陽高（ヤンカウ）に左遷された。夫人も子どもたちといっしょ

に山西へゆくことになった。順子は1969年12月から北京にひとりで残って、退職恩給で生活することにした。それ以前にも、順子には結婚の話はいくつもあったが、順子自身に結婚する気がなくて、ことわっていた。しかし、その4か月後の1970年4月に、印刷局の人の仲介で、陶福宝と結婚した。

柳・陳夫妻は現在では西安に住んでいる。柳静は西安の第四軍軍医大学の政治委員である。

V.

陶福宝（トウ・フウボウ）は、順子より1歳年下で、江蘇省の出身である。1952年上海で試験を受けて鉄道部に入り、北京に来て、鉄道部建廠局に勤める労働者で、まじめいっぽうの男で、共産党員である。死んだ先妻の子が4人（上の3人は女で、末っ子が男）いた。いくらなんでも4人の子どもとは多すぎるだろうと忠告する友達もいたが、順子はそんなことを気にしなかった。この結婚にあたって順子が出した条件は、つぎの一つだけだった——中国では、ふつう、生みの母親以外に対して、義理の子たちはなかなかお母さんといわない習慣なのだが、順子に対しては、子どもたちに「お母さん」とよばせるということだけであった。そしてその約束をまもって、結婚の翌朝から、4人の子どもは順子を「媽媽」（お母さん）とよんだ。

陶福宝は男手一つで4人の子をかかえて、労働者として毎日働いていたのだから、順子の結婚当時は子どもたちの衣服はぼろぼろで、家の中はひどくきたなかった。順子は、柳さんの家にいたときは順子の退職恩給がほとんど丸残りの状態だったから、かなりの貯金を持っていた。その貯金で子どもたちの衣服をととのえたり、家具を揃えたりして、貯金をすっかり使ってしまった。

ところが、陶福宝は1975年に脳血栓で右半身不随になって、寝たきりの状態になった。食事のときに寝台の上で半身を起こすのがようやくである。

耳も目もきくので、理解力はあるが、口が半分麻痺しているから言葉をいうことはできない。だから順子は、その後はこの病夫の世話にかかりきりである。

夫の陶は勤続年数が20年以上だったから、その退職恩給は勤務当時と同額である。順子にも前述の退職恩給があるから、それを合わせれば、生活費はまにあう。4人の子どももいまではすでに成年になった。末のむすこは父の以前の職場に勤めるようになった。その上の3人のむすめはすでに結婚している。そして、長女は技工学校の教師、次女は北京市のある役所の打字員（タイピスト）、三女は建築関係の設計の仕事に、それぞれ働いている。その夫たちも、技術者や教師などの仕事に勤務している。そういうふうで、順子の一家は、北京の典型的な近代的労働者一家である。

順子が結婚したときに、長女はすでに12、3歳になっていたから、かの女は生母の死後、幼い弟妹の世話をするのに苦労した。だから、きょうだいたちのなかでも、順子にたいする感謝のきもちが深く、お母さんの老後はぜひ自分が世話したいという。順子も、末のむすこが結婚したならば、長女といっしょに暮らすようにするつもりである。

現在の北京では、台所の煮炊きにはプロパンガスを使っている。プロパンの備えのない家では、ふつう、煙突のついた鉄製の大きい煉炭ストーブを使って、煮炊きをするし、これが暖房も兼ねる。

北京では、冬は、野菜は白菜と馬鈴薯ぐらいしかない。豚肉はいつでもあるが、牛肉はほとんどない。魚もほとんどない。牛乳は、3歳以下の子どもと70歳以上の老人以外は買えない。ただし病人で牛乳が必要という医師の証明書がある者は牛乳を買うことができる。それ以外の者は粉ミルクを買って使うことになるが、これは高価である。

北京ではいまでも一般的に正月の祝いごとは旧正月にする。そして日本ではお正月に各家庭でお雑煮をつくるように、北京ではどこの家でもお正

月にギョーザをつくる。

順子の退職恩給は勤務したときの75%で1か月36円、夫の陶富宝は100%だから59円である。

(中国の1円は、日本正金銀行の為替相場では、1987年現在日本の約40円にあたる)。しかし日常生活費目の物価水準がまったくちがうから、簡単に当てはめることはできない。順子は東京へ来て、交通費が高いのにおどろいていた。北京では、順子たちのばあい、家賃と電気、水道、ガスなどは、合わせて1か月7円か8円ぐらいであって、そういう経費は割合に安い。

順子たち夫妻の生活費はふたりの退職恩給でいっぱいであって、余裕はない。けれども医療費は完全に無料である。死ねば、電話1本で、ただで死体をはこんで行って葬るまでいっさいを無料でしてくれる。葬式費用を用意しておく必要もない。

付記

順子は、1983年末から84年へかけての1か月あまりの訪日のあいだに、私の家にも1週間滞在したが、いつも、食事のあとは、おやと思う間に皿や茶碗などいっさいの洗いものを手早く済ませるし、座敷の掃除はもちろん、1日うちにいた日には私が何年も拭いたことのないガラス戸まで透きとおるようにきれいにみがきあげてくれた。「順ちゃん、そんなに働いてくれなくてもいいのよ」と私が言ったら、順子はにこにこして「働かざる者は食うべからずと言いますからね」と、冗談めかして言った。順子の口から「社会主義」らしいことばを私が聞いたのはただこの一度だけであった。

私のところでばかりでなく、順子が5、6日滞在した富塚の家でも、その女主人である私の姪の麗子は、順子の経験話に興味を持って、テープレコーダーに取ったりなどしたが、あとになって、私に向かって、順子さんは社会主義思想のようなことを一言も言わなかったと感心していた。私も、

その点は、口に出さないが心中で注目していたことだった。

順子は40年ぶりに日本をおとずれたのにもかかわらず、戦後に一変した東京の街を見物しようなどという興味はいささかも示さず、ただ親類の家をおとずれたり、昔の甲南高女の同級生で在京の人たち十数人が順子のために歓迎の会をもよおしてくれたのに出席して交歓したりしただけであった。そしてかの女の留守中は長女が勤めを休んで、半身不随の老父の世話をひきうけてくれているから早く帰らなくてはならないといって、帰国の航空機の予約を急いで、いそいそと北京へ帰って行った。

順子はいまも日本語をすこしも忘れていないし、中国語の読み書きもできる。しかしいわゆる「社会主義理論」の抽象的な思想問題には興味をもたないし、「共産党の政策綱領」などにも別段に関心をもたないであろう。おそらく現代の中国民衆の圧倒的大多数がそうだろうということは、たとえば現代の日本でも、一般の人たちは目の前にいつも投げ出されている諸新聞の政治面をながめて見ることもしないのと同様であろう。中国民衆が現在の中国共産党政府を信頼し支持するのは、この共産党がかかげている思想や政策などを理解したからではない。圧倒的大多数の労働者や勤労民衆は、さようなむずかしい「思想問題」をはねおって勉強する必要はないと思っているであろう。順子も、まごうかたなく北京の近代的労働者階級の一人である者として同様なのである。

順子の「思想」は、一言にいえば、人間は、人間としては、上も下もないはずである。だれでも平等な立場でなければならない。女も、男たちとかわりなく、一個の自立した人間として、だれに対しても自分を卑下することなく生きることができなくてはならないはずだということである。これは、中国共産党とその八路軍が生まれたときからの基本思想にはかならない。これが「社会主義」



吉原 順子
1983年9月、北京で撮影

であるかそれともただの「民主主義」であるか？などという、学者たちの論議は、女たちにとってはどうしてもいいことである。要は、それが、社会生活の現実の人間関係のなかでつらぬかれているかどうかということである。

順子は、戦前の日本での出身からいえば、労働者階級に属する者ではない。しかし、もともと個々人の出身がどのような階級に生まれたかということとは、運命の偶然であって、本人が知ったことではない。階級とは、各人が社会経済のなかで現在現実^にに占める立場である。私が「おしん」というテレビドラマをはじめから嫌いなのはこの理由である。貧乏人の家庭に生まれても、安田善次郎をはじめ大財閥になった者はいくらかもある。各人の生まれは、階級区別とは関係がない。このことを明らかにしたいつもりで、私ははじめに順子の戦前の境遇をくわしく書いた。

順子は知らずにいたが、戦後には、順子の長兄は東北大学農学部教授であり、姉の夫は宮崎大学農学部教授であった。しかし順子のきょうだいや近親がどういう地位や生活であろうとも、すでに中年過ぎて、戦争によって夫と子を亡くしてひと

りぼっちになった順子は、日本に帰国すれば、お金も収入も持たない女として、身うちの者の厄介者扱いにされるよりほかはないだろう。中国につづけて住んでいて一個の労働者として誠実に労働するかぎり、女であっても異民族であっても、いささかの差別待遇もない。一個の自立した人間として、だれに対しても心中にひきめを感じる必要がない。老いても、生涯の退職年金を保証されており、病気すれば医療はまったく無料で、死んでもだれにも葬式費用の厄介をかけずに、安んじて北京の土になることができる。日本の女である私たちには、このことの意味が痛いほどよくわかる。

私たちをおどろかせたのは、40年ぶりに会った順子が、礼儀正しくつつましい態度ながら、いつも、あどけないと言いたいような明かるいにこにこした微笑をたたえていて、多年の苦労のあとをいささかも感じさせないことだった。

中国研究月報4月号〔予告〕

特集・中国の『国際大循環論』

——解説・基本資料——

(山内一男, 辻 康吾)

論述・中国の財政体制改革について

(唐若寛)